

第一回公開読書会での発言メモ

採用した書名 穂積隆信著「積木くずし」（桐原書店 1982 年発行）

（発言は、2 作目の「-由香里の死 そして愛-積木くずし 終章」を下敷きにしています）

開催日 2023 年 3 月 19 日 13：30～、場所 図書館視聴覚室、出席者 老いも若きも読書会会員

< 1 > 「積木くずし」を選んだ経緯

当会「老いも若きも読書会」主催の公開読書会「読書 de 交流」を開きました。選定図書は、県立図書館所蔵「読書会テキスト一般書」の中から、当会にて選定を行い、全員一致で掲題のとおり「積木くずし（穂積隆信著）」を選びました。

会員の間でも、既に読書済の人、更に「・・終章」まで読んだ人、未読の人など、それぞれでしたが、公開読書会を行う前に、準備として「積木くずし」を読み、その読後感を会員全員で述べ合いました。

公開読書会の当日は、かなり活発な議論が行われたと思いますが、一般参加者の発言を聞くことができなかったことは残念です。

会のオープン化を更に進め、名実共に、老いも若きも読書会に成長させたいと思います。

< 2 > 読後感の概要

ストーリーの概略はつぎのようなものです。

一人娘の由香里が中学へと成長していく過程で、いろいろな要因から不良化し、それも、かなり悪い方向に進んでしまう。その中で、紹介された警視庁心理鑑別技師の指示に従い、状況は大きく改善され「生んでくれてありがとう」と由香里が話すまでに回復する。

妻の日記をベースに、夫が書き下ろした実話です。

この本が書かれた当時は、少年犯罪が多発し 1985 年には発生数がピークになっています。

公開読書会での皆さんの感想は次のような内容です。まずは概要です。

- ① 読書一回目の読後感は「著者が同年配なので、とにかくショックを受けた」、二回目の読後感は「子育て・教育・集団・共同体」というものについて考えさせられた。
- ② 自分の子育ての経験と重なり、人間形成時に親の関わりがとても重要であることを示しており、一読を薦めます。
- ③ この本で取り上げるようなひどい状態になる前が一般的であり、そこでは「親子の話し合いと親の忍耐」が重要。書中、この時期が欠落していることを前提に読む必要があります。
- ④ 警察の心理鑑別技師は、一方的に説明しているだけであり、相談相手を間違えている。

親も、金で解決するという、バブル期の悪い態度が出ている。

- ⑤ 母親が被爆者であり、由香里自身は入院がちな、苦しい幼少期を過ごす。心身ともにボロボロになった後に「生んでくれてありがとう」と語りかける由香里は、すごくかわいそう。一方で父母の考えが、おもてに全く出てこないことが問題です。

< 3 > 警視庁心理鑑別技師の指導方法について

本書の重要な登場人物である警視庁心理鑑別技師の非常に厳しい指導方法は、結果として成功であったと思いますが、一方的過ぎる指導と見て、方法論としてまちがっているとの指摘もありました。特に、指導内容の理由説明がないことが問題であり、穂積さん側は、理解していないまま従ったという側面があるのではないかと、また、所管の警察署を無視しているともみられるようだと指摘もありました。

逆に、これをもって、精一杯の指導の厳しさと理解し、由香里が更生できた要因であるという見方もあり、心理鑑別技師の指導に対する評価は両極端に分かれました。

< 4 > いろいろな視点

- ① 由香里の心の変化「母は世界一です。悪いのは私です」に到る内面の変化あるいは外部要因について説明が欲しかった。別の言い方をすれば、その部分で、親としての関与が薄かったのではないのでしょうか。
- ② 中二で警察に電話できたという事からみて、由香里にはすごい才能がある。
- ③ 介護士の資格を取っている。由香里は立派な人である。
- ④ 穂積家に集まってシンナーを吸うという悪いことだけに映るが、社会全体を見渡せば、よい子になっていく場合もある。実際に「たまり場」を作り、そこに集まる子供の中から立派な子供が育ったという報告もある。「排除する、隔離する」という社会側の態度が問題なのではないか。
- ⑤ 「教育」の問題・責任は大きい。一方で、教師には過重負担がかかっている。給料を上げて、人員を増やすという施策が必要だ。
- ⑥ 核家族化すると、善悪の判らないまま育ってしまい易くなる。反抗期もある。親の方も「待つ余裕」「我慢する力」を身に着ける必要がある。
- ⑦ 社会も成長する必要がある。歴史の時間軸で考えることも必要だ。
- ⑧ お父さんの態度はかなり問題である。断絶、無責任、第三者的、と感じる部分で、父親自身は「不思議＝私は関わっていない」と感じている。また、お父さんお母さんの話合いが無い。
- ⑨ 長老が「これが必要なんだよ」といってやることも必要。私達が頑張らないと。

< 5 > 「積木くずし」で足りないこと、そして結論

「積木くずし」では、肝心の原因の掘下げが不足している。というよりも、掘下げが無い。

頬に切り傷を負って帰ってきたことで、親は状況の深刻さを思い知る。しかし、実際に

は、その際に性的暴力を受けていたことの方が、由香里の心に重大な影響を与えていただろう。

語弊があるかもしれませんが、由香里には、芸能人の子、赤坂育ち、母親の被爆、など、結果として見ると、つらい条件が重なっています。

この本は、由香里が経験した、成長過程での多くの苦労を赤裸々に語ることで、そして、親の重い責任を気付かせてくれることで、時代の警告書になっているのではないのでしょうか。

文責 会員) 畑石
以上